

1. 研究について

♥ 大きな目的

グループ学習や個別学習など特定の学習形態のみを支援するのではなく、様々な学習形態を実現可能で、様々な学習形態に対する支援機構を保持するシームレスな学習支援環境の実現

- ✧ 学習者がいつでもどこにいても希望する形態で学習できる.
- ✧ どんな形態で学習していても効果的に知識が獲得できる.

♥ アプローチ

3 種類のエージェント, coordinator, assistant, learner の導入

- ✧ エージェント同士のコミュニケーションによって異なる学習形態を実現
- ✧ 個々のエージェントに様々な学習形態に応じた支援機構を構築



♥ 小さな目的

正解とその導出過程が記述できる問題（例：高校数学）を対象にした協調学習環境において、効果的な学習・議論を促進するための個々のエージェントの学習支援機構の構築

2. 10年後の教室

♥ 教室の風景

生徒と教師の机にはコンピュータが配置され、生徒-教師間はネットワークで接続されている。（生徒-生徒間はおそらく接続されない）。先生のコンピュータは外部とも接続されており、WWW へのアクセスはもちろん、他の教室や学校ともコミュニケーションできる。教室にはスクリーンと黒板が併設されるが、先生は黒板に記述するよりもスライドや電子教材をスクリーンに映すことで授業を進めるだろう。

♥ 教材

基本的には教科書を用いるが、教師が必要だと思う電子コンテンツは教材として生徒のコンピュータに送信される。生徒はタブレットペンのようなものを用いて電子教材上に自由にメモ書きができる。もしかしたら鉛筆やノートはあまり用いられず、コンピュータ上の電子ノートを用いることが主流になっているかもしれない。

♥ 個別学習

自習時間などには生徒はコンピュータ内にあらかじめインストールされた問題集代わりの独習用ソフトを用いて学習する。教師の希望によっては生徒の学習履歴はネットワークを通して教師のコンピュータに送信され、教師はそれを見て特定の生徒に個別指導をしたりもするだろう。